

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

連合ボランティア報告（第18次）



仲間と協力し、被災地の復興のために汗を流した4日間は、私にとってかけがえのない日々となった。

いざ、ボランティアの日程が近づいてくると、自分にできることがあるのかという不安と早く活動に入りたいという焦燥感でそわそわ落ち着かない毎日を送っていた。しかし、連合の仲間はもちろんのこと、ボランティアセンターに集まる他の団体の仲間の姿を目にした時に、不安がうそのように消え、感動すら覚えた。全国から駆けつけた仲間にも励まされ、みんなと同じ気持ちでとりくめた4日間だったことは間違いない。

奇しくも震災から5ヶ月を迎える被災地での復興支援となり、感慨深

い活動となった。それまでの自分は、震災は遠い所で起きたこと、テレビの中のできごと、と心のどこかで思っていたように思う。実際に目で見て肌で触れて、震災はたしかにあったと実感した。戦争での焼け野原と重なる、と誰かが呟いていたが、確かにそんなイメージに近い。5ヶ月経った今も、至る所に散らばる瓦礫を目にした。ところどころに無残に破壊された家と無事な家が混在していて、津波による被害が紙一重だったことがうかがえた。瓦礫の残る寺や田畑での作業では、草刈や瓦礫の撤去、側溝の泥出しなどにとりくんだ。ガラスや木片、食器類などがあちらこちらに散らばっていた。そこに住む人々の生活が破壊された確かな証拠。集めた瓦礫は、重機によってダンプに積み込まれ、海岸の集積場へ運ばれていった。

バスの中から見えた景色。うず高く積み重なった瓦礫。わずかに残った壁に「撤去願います」という悲しいメッセージが書かれた家。何万本もの松原でたった1本残った松の木。仮設住宅の建ち並ぶ小学校のプールで遊ぶ子どもたちの声。たくさんのひまわりが花を咲かせている畑。防波堤工事の始まった海岸。

復興にはまだまだ時間がかかりそうだ。だけど、少しずつ前進している。

被災地には、報道では伝わってこなかったこと、報道されなかったことがたくさんある。苦難を乗り越えて、再びこれまでのような生活をはじめた人たちもいる。これは被災地に足を運ばないと見えないことだ。小さな力ゆえに、わずかな手助けしかできなかったボ

ランティアだったが、今後参加してくれる仲間たちに思いを託したい。佐賀からできること…。周りの人に被災地のことを伝えること、被災地のことを意識すること、支援のためにできることにとりくむこと…。何年もかかることだからこそ、継続して支援していきたい。

